

7・8月号の教育展望は、飯野正子津田塾大学長による「私の好きな言葉一生涯、学び続ける姿勢」が巻頭言を飾っている。

「私たちが力点を置いてきたのは、皆さんが学んだ量でもなければ、読んだ本の難しさでもありません。私たちは、皆さんが細心にして正確な思考の能力を身に付けるよう願ってきました。皆さんが単に学ぶだけでなく、これからさらに学び、考えることができるようにとのねらいからです。……教師や他人に依存することを促すような教育は、卒業して校門をあとにするとともに終わってしまうような教育なのです」

飯野学長は、1910年に女子英学塾を巣立っていく卒業生に津田梅子が贈った、このはなむけの言葉を引用して、「教育とは、学びの場に巣立った後、いつの時点であっても、自分の力を十分に発揮して社会に貢献できる場に自分でおくことであり、学びの場は、そのための力量を身に付けるところです」と述べ、この巻頭言にいくつかの至言を与えてくれている。印象に残った次の2点を紹介しておきたい。

○「社会に貢献できる力量」とは、資格やライセンスだけではないはずだ。

○「学び」とは、資格だけで求めるものではなく、生きていく上での底力、いろいろな問題に対応できる力をはぐくむこと。その力の基盤には、「自分で考える姿勢」と「生涯を通して学ぶ姿勢」があり、それを身につけていけば、平坦でない道に出会っても、道を切り開くことができるのだという、津田梅子の考えは今も生きています。

脈々と流れる津田梅子イズムであろうが、この短いセンテンスに込められた意味は昭和58年以降、学校を生涯学習体系に位置づけた基本的な理念とほぼ同じではないかと思うのである。実に輝いている。

津田梅子。彼女は教育を通して女性の地位向上を願い、女性が自立することをめざした。よくよく考えてみれば、それが女性の自立を願ったものであったとしても、「自立」そのものは、「個を伸ばす」「生きる力をはぐくむ」等の近年の教育改革の根っこに流れているものであるから、これらのことばが現代的な輝きを発するのは当然と言えよう。

津田塾大学というと、まこと私的ながら1人の教え子を思い出す。私の退職を祝ってくれた、この教え子、村木真子(仮名)は、K中を昭和61年3月に卒業してN高に進学。N高から津田塾大の英文学科に。同大卒業時に津田梅子賞。つまり首席卒業。卒業後は外資系の証券会社に就職し、そこから筑波大学大学院ビジネス科学研究科博士課程企業科学専攻へ。そして今度は同大大学院修了時に総長賞。その後、筑波大学博

士特別研究員を経て、現在は、同大大学院ビジネス科学研究科の准教授として社会人相手に現代商法の基礎、金融商品取引法、会社法あるいはアメリカ取引法文講読などを担当し指導している。

教え子自慢をするつもりはない。

彼女の出身高校はN高(H高ではない)。大学も津田塾大で名門校とはいえ塾や進学校が合格をアピールする超難関大学ではない。だが、大学、大学院でともに首席卒業する人物はそうはいないであろう。しかも学部では英文学科で、大学院でのメジャーはビジネス科学。この転身もおもしろい。

これらを可能にしたのは津田塾大の4年間にあったのではないかと私は見ている。先に述べた飯野学長は、自立をめざし「自分で考える姿勢」「生涯を等して学ぶ姿勢」を身に付ける重要さを強調されていたが、おそらく、その学風に彼女の学びのスタイルがフィットしたのである。

ここでしばらく、彼女の中学校時代を語る。

私は彼女の国語担任だった。国語で忘れられないのは、彼女の優れたノート術だった。私の授業では、ノートは見開きにして使うことになっていた。授業で板書を写したり、書き込んだりするのは見開きの下の頁。上の頁は予復習等に使用。家庭学習をしなければ上は空欄になる。彼女はこのノートの使い方が抜群だった。単に板書を写し取っていたのではなく、下の頁には板書事項に加えて、自分が感じたことや自分なりの理解がメモされていて、上の頁には自問自答での追究があったり、疑問が書かれていたりしていた。ここに授業内容を自分の中に落とし、それを再び問い直すような学びのスタイルが読み取れたのである。

津田塾大の「自ら学び、自ら考える風」に、彼女の学びのスタイルがフィットした。加えてあのノート術に見られた学びのスタイルが有効に働いたというのが私の見立てだ。

学風というのは一見ただのうたい文句のように感じるがそうではない。私の出身高校は「進取の気性」を校訓としていたが、私を知る人は、合点するのではないか。新しいもの、コト、考えにはかなり敏感に反応する。新しいもの好きですぐに飛びつく。これには高校のDNAが流れているのだろうと自分で自分を笑っている。

この「風」は、経営組織論の高橋伸夫も取り上げておられるが、高橋はHONDAを例に組織が重大な意思決定する際に働く気分のようなもの、「勢い」と解説している。重大な決定もこの社風がかなりざっくりと働くのだそうだ。

小中から高校を飛び超えて—そう私は見ている—大学で開花したことにも関心がある。

彼女のノート術に見られるような学びのスタ

イルやスキルは、「自ら学ぶ授業」では重要ではあるが、教えられたことをひたすら飲み込む教育や難関大学入試合格者数を教育の成果として誇るよう学校態勢では（津田梅子が述べる「教師や他人に依存することを促す教育」のことであるが）、殆ど意味をなさないものと言える。ゆとりをもって自分なりに考えたって、テストには生きないし、それ自体が必要ないからだ。

2011年の中教審教育振興計画部会において、大学教育の基本課題として委員の1人から「学生は授業には出ているが、自分で学習していない」という指摘があったが、私どもの学生時代とは隔世の感がした。私でさえこんな経験がある。年度初めに1度出たきりだった漢文学講読の授業で、年度末になって担当教授に、授業とは全く無縁の「屈原の『楚辞』論考」を20枚ほど書いて送付したら何とAの成績がついてきた。「授業に出なくても漢文学を学んだ」ことが評価されたと理解しているが、自慢でもなく何でもなく当時はありふれた話だった。

大学は自らが学ぶことが前提になっている。その中に飛び込んだ学生が、自ら学ぶスタイルやそのツールを持ち合わせていなかったとしたら…授業以外に何をどのように学んでよいか途方に暮れるだろうし、自分で学習しようがないのだから学習する時間だって少なくなる。学問の楽しさを味わえずに卒業する学生は何と不幸なことか。

余談。今時の学生は自らを生徒と呼ぶと某氏は嘆かれていたが、その精神性においても「自ら学ぶ」学生になり得ていないということだ。

高校関係者と話すと例えば数学の公式を「そんなことは覚えてしまえば速い」と言い放つ方が多い。特に進学校の先生方の間ではそれが顕著だ。覚えさせ、それに当てはめて解答する技術を教えても、試験には有効かもしれないが、そんな学力は6か月もすれば消えてなくなってしまう。某有名私大が入学者に入試と同じ問題を6ヶ月後に課すという実験をしたら、何と正答率は20%だったという。忘却曲線が証明されたようなものだった。

記憶は脳のメカニズムから言えば消えていくのが自然だ。それに反して1度身に付けた学びのスタイルやツールは、自転車に乗れる、泳げるようになるのと同じで消え去るものではない。どころか、それらが生かされる場を得たときは、より豊かな学力となって還ってくるはずなのである。

上級学校へ行けば行くほど、また教師や他人に依存することができなくなればなるほど、「自ら学び、自ら考え」という学びのスタイルは重要になっていく。例えば、週1単位時間だけで第2外国語が身につくはずがなく、必死になって自学するから習得できるのであって、授業だけではとうてい単位取得は不可能だ。実社会では、現実に即して仕事をするのであるから、自

ら学び自ら考えなくては仕事にならないのである。社会が要請している能力を見たらいい。

当然のことながら高校の進学校だって「生きる力の育成」が免除されているわけではない。自校ならではの生きる力をはぐくみ、次のステップに送り出すのは学校の責務だ。ところが、麻布学園の「論集」のように優れた取組がないわけではないが、多くの進学校が単なる受験対策校になっていて予備校とのボーダーを引きがたい状態になっている。大事な青年後期に「生きる力育成」の空白期を生み、「自ら学び自ら考える」スタイルをはぐくむ機会を逸している。それより怖いのは、誰かに教えられ、教えられたことをそのままに覚える学びのスタイルを身につけていったとしたら…。こんな教育はすでに明治の時代に二葉亭四迷らが「鶴呑み教育」として激しく批判していることでもある。

少し遠回りする。

日本の教育の転換期はいくつかあったが、戦後教育史において46答申と並んで昭和58年の中教審教育内容等小委員会審議経過報告が重要だったと思っている。

昭和58年の転換は、生きていく上で必要な知識・技能を全て学校で教える「完成教育理念」から、生涯にわたる自己教育を求める生涯学習の理念を導入を図ったもので、学校の役割を生涯にわたって自己教育を行う上で必要な基盤を形成するものと位置付けたものだった。

この理念は、その後の臨教審にも継承され、「個性重視の原則（個人の尊厳、自由・規律、自己責任の原則）の確立、生涯学習体系への移行、変化への対応（国際化、情報化）が答申されることになる。

そして、それを受けて平成元年以降の学習指導要領は生涯学習の理念のもとに新学力観を形成していったのであった。

従来とは順序が真逆の「関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解」という観点。内容知のみならず方法知、自分知を獲得させ、「生きる力」がはぐくまれるようにレイアウトされた教育課程。生活科を誕生させ、平成10年告示の学習指導要領では総合的な学習の時間を創設し、そして新学習指導要領では道徳教育の重要性や言語活動の充実にも手を加えて、21世紀型の学力が身につくように改善を加えてきた。さらにこの学力を担保するために評価改善も行った。それらは、激しく変化する社会の中で、その状況と向き合い主体的に生きることのできる資質や能力の育成を確かなものにしていくという改革だった。

生涯学び続けるのが理念だから、当然ながら子どもが学ぶ授業が想定されている。子どもが学ばなければ「関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解」ははぐくまれない。この当たり前のことが前提になった教育課程の改善だったが、実際はこのことが授業段階にまで碎かれていたわけではない。「周知されなかつ

た」と文科省は総括したが、「生きる力」というフレーズを知らなかったわけではなく、授業像を構築し得なかったというべきなのである。

では、文科省が手抜かっていたのかと言えばそれも違う。

平成 10 年の学習指導要領においては、例えば、算数 5 年図形の面積の求積において「既習の四角形の求積をもとに…」という具合で「既習事項」を「活かす」ということにおいて「生きる力」の育成をレイアウトしていた。要するに「活かす」という学び方の中に「生きる力」を育成するためのミッションを込めたのであった。

しかし、この「既習の」「もとに」というフレーズのもつ重要さが授業者に認識されず、授業では解答術が優先されるような授業一問題解答型授業一が横行していたのであった。

「既習の…をもとに」は学び方であって方法知だ。面積を公式に基づいて求められたとしても「活かせる」という資質や能力が形成されなければ、学力が身についたとは言わない。それが生涯学習下での学力なのである。

それは子ども自身が知の獲得を確実なものにしていく学力であり、その後の学習の核になる学力である。このような学力を立体的な学力と私は称しているが、それは精選された教科内容を確実に習得するのはもちろん、関心・意欲をエンジンにして、それを獲得する方法（方法知）によって、より教科内容を自らの中で増幅させていける学力を立体的と表現したのである。学習内容という平面だけではないのである。

第 15 期中教審第 1 次答申の中には至言がある。「いかに社会が変化しよう」との一節だ。これに続いて「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性であり、そして、また、たくましく生きていくための健康や体力である」と生きる力の定義が続く。

「いかに社会が変化しようとも…」には、社会が変化し、先行き不透明な時代であること、厳しい時代であることも意識されているのであろう。だが、その社会の中に私どもは生きているのである。自ら見つけるべき課題は、自分が生きているこの足下にあるのであって、遠く宇宙の果てにあるわけではない。また、課題だど気がつかなければ課題はないのである。学ぶ対象が決まっているわけではなく、社会の進展に即して内容も変化していく。それでも、この瞬間に知を働かせて課題を見つけ、自ら解決していく、そうした力。

生涯学習の理念がなぜ重要かと言えば、学ぶ対象は社会の変化や進歩、それに状況に応じて変化し続けるのであるから、それらが変化したとしても学び続けられる学力がこれからの時代を生きていく人には必須の学力だということだ。

実際、私どもは学びの対象や内容の変化を歴

史的には何回も経験してきている。戦後の塗りつぶし教科書はもちろん、ベルリンの壁の崩壊によって、幾多の国々が地図上に登場したり消えていったか。今やソ連は地図上からは完全に消え失せている。いくら地図帳を覚えこんだって役には立たない。地図帳を覚えるのではなく使えるようにすることなのである。

教科知とは「内容知」「方法知」「自分知」だとしたのは東京学芸大附属大泉小の研究であったが、学ぶ対象や内容となる知自体が変わって、陳腐化が激しく起こるとすれば、教科知の中でも、方法知や自分知に重きが増してくるのは当然だ。それでも内容知に拘泥しそれを優先する授業をしていたら、分かんね、つまんね、役にたたねーの学びの逃避行を生み出すだけだ。大泉小の研究は、そうした社会の変化の意味をとらえ、内容知、すなわち教科内容とのかかわりにおいて、方法知、自分知を獲得することで、教科知を確かなものにしていく実践だったのである。

ここまで申し上げれば、私が、なぜ村木真子の学びのスタイルに着目したのか、ご理解いただけたかと思う。

彼女に先に述べたノート術のようなスキルを伴った学びのスタイルが確立されなければ一飯野学長が主張されている「生涯学び続ける姿勢」をはぐくむことも、彼女自身が自らの人生自ら切り開いていくこともおぼつかなくはなすのである。

もちろん、彼女が中学生だった 50 年代後半に生涯学習の理念が確立されていたわけではないし、生きる力の育成が学校教育のテーマだったわけではない。

だが、彼女の津田梅子賞は英文学科でのもので筑波大院での総長賞はビジネス科学だった。しかも、商法、証券法、法とテクノロジーなど、彼女の中学校時代ではおよそ想像もできない分野での飛躍だったが、それを可能にしたのは、くどいまでに申し上げている彼女の学びのスタイルやノート術に見られる学びのツール、大泉小のいう「方法知」「自分知」の部分と津田塾大で、より確かなものになった語学ではなかったかと思うのである。

再び教育課程に話を移す。

総合的な学習の時間の原型に（直接的ではないが相当に意識したと言う意味で）、昭和 30 年代に一世を風靡した長野県の伊那小の実践があった。同小では、低学年はすべてが総合学習であり時間割がなかった。驚くことに通知表もなかった。

総合的な学習の時間の創設は平成 10 年告示の学習指導要領だった。だから村木真子にはそのような学習機会があったわけではない。そのことを承知の上で、迂遠ながら総合的な学習の時間について述べておく。

平成 9 年当時、教育課程審議会では教科横断

的総合的な学習として総合的な学習の時間の創設が論じられていた。その際、教科の限界が話題になったことがあった。限界と言うより、教科の使命と言った方がいいかもしれない。教科には教科毎の目標や内容があって、それに基づいて学習を進めることになる。だから教科書もある。どのように主体的な学習を進めようとも、問題解決的な学習で自ら学び自ら考える学びのスタイルを確立しようとも、それは教科書を主とした教材とのかかわりの中での学びだった。要するに決まった教材とのかかわりの中で学びが進展していくのが基本で、学習材が自由になっているわけではない。教科内容の確実な習得は教科学習の軸ともいえるもので、自ら学び自ら考える資質や能力の育成は、教科内容とのかかわりにおいてはぐくまれるようになっているのである。

逆説的に申し上げれば、教科学習では「自ら課題を見つけ」に自ずと限界を有するということなのである。

学校教育の計画とも言うべき教育課程は、教科等が分担し合って、「生きる力の育成」が図られるようにレイアウトされている。

しかしながら、どうして社会科で人権を学び、道徳で「思いやり」を学んだ子がいじめに走るのか。どうして社会科で公民的資質の育成を図られた子が選挙を棄権するのか。どうして国語を学んだ子が読書嫌いになり、まともな文章も書くことができないのか。教科学習と実生活との乖離は枚挙にいとまがない。

学校教育の使命が「資質」の育成にあるとするなら、教科等で学んだことが個の中に総合化されて息づき、自らが現実社会の中で生きていく力として働くのが当然で、そこに教育課程の構造上の問題意識を抱くなら、教科横断的総合的な学習の創設が模索されるのは自然だった。

要するに、学習材を教科の枠から解き放ち、「自ら課題を見つけ」ということがなかなかできないという教科等学習の限界を補いつつ、教科等で学んだことを自らの生き方の中に生かしていく学びの体験。それが総合的な学習の時間の使命だったのである。

「伊那小の子供たちはほぼ全員が伊那中へ進学する。そこで初めて通知票を手にするようになる。高校、さらには大学へと至る長い道程を展望し、競争原理によって動いていく一つの戦いの場に、いま自分が立っていることを知る。」NHK取材班の手になる「日本の条件」(教育)で伊那小の特異な教育実践をこう紹介している。

学校は人づくりの場だというのが、それがかけ声だけでないことは、初めて中学で通知票を手にする伊那小の子どものその後の成長からうかがい知れる。この学区から進学する高校のうち県下有数の難関校、伊那北高には、全部で14の中学校から受験生が押し寄せるが、もっとも高い入学率を上げるのは伊那小の卒業生だ。

……………
だいたい「総合」にこの稿の紙面を割きすぎたし、迂遠になった。

ただ申し上げたかったのは、子ども1人1人において学びの核をはぐくむことの重要性だ。村木真子のように英文学を学んでもそのままに実社会が直結しているわけではない。学んだことを生かすとは、その内容を生かすだけではなく、自らの学びのスタイルを生かすことだ。村木真子の場合、「学び」の対象が英文学からビジネス科学に移っただけの話で、「学び」は「学び」なのである。「自ら課題を見つけ」「自らの生き方の中に生かす」。これこそ普遍で不易な学力と申し上げたいのである。

繰り返すが、彼女の育った時代に「生きる力」の育成というテーマがあったわけではない。「総合」も存在したわけではない。しかし、彼女の持ち合わせた姿勢やスキルは極めて「生きる力」の具体に近く総合的な学習の時間で培うべき資質や能力にも近かったということだ。

近年、脳科学が発展により、能動的な学びが脳を活性化することが明らかになってきている。そう考えると彼女のような主体的な学びのスタイルやツールを持ち合わせて学ばせることが、指導のスキルとしてますます重要になっていくであろうと考えられる。

教え子のその後から、「生きる力」や「総合」に話を飛躍させて、教育談義の旅を楽しませていただいた。かなり牽強附会であることは重々承知している。だが村木真子の人生を窓にして、結果論としてではあるが、主体的に学ぶ姿勢に加えてスキルを持ち合わせていることの重要性を改めて認識したのであった。

飯野学長が強調されるように生涯学習の理念は重要だが、そこに学びのスタイルやツールが伴わなくては、それはただの理念で終わり、「教育」にはならないと申し上げたいのである。

もう一つ付け加えておこう。

確かに彼女は優れていた。読書感想文では3年間連続入賞だったし、書き上げる文章に含まれている情感も豊かなものだった。だが、だからと言って国語のテスト成績が抜群であったというわけではない。授業中の反応や書き物、読んだ本の感想。ノートに書き込まれたメモ。それらはテスト成績とどうも折り合わなかった。テストだけでは彼女の国語力を捕捉しきれないと感じたのである。当時はまだ、相対評価の時代で、観点も最上位が「知識・理解」だったので、かなりテストに依拠した評価方法しか持ち合わせていなかったからかもしれない。

終わりに恥ずかしいことを付け加えておく。

彼女の卒業と同時に借り受けた、このノートは現在行方知れず。恥ずかしい限りだ。確か誰か国語科の教員に貸したような記憶があるが…。申し訳ない限りだ。